

1 研究の内容

(1) 研究の目的

昨年度より、本部会では、「探求し続ける身体」をテーマに研究を進めてきた。前テーマである「自己・他者・モノのつながりから学びをみとる」の頃より追求してきた、「教師自身が自己を問い直し、子どもの学びのみとりについて考える」ことを継続しつつ、全体テーマ副題にもあるように、教師も子どもとともに“てつがくすること”を通して、これまでの授業を問い直し、改善していく手がかりを探り、その実践例や学習プロセスを提案することを目的としている。

(2) 研究テーマ「探求し続ける身体」を求めて

本部会は、体育と“てつがくすること”の関連として、「探求し続ける身体」を育むことが重要であると考え、「探求し続ける」としたのは、一過性の探求に終止することなく、探求することがおもしろい、問いをもち考え続けることがおもしろい、という姿勢をもち、自ら探求の世界に身を置いて“てつがくする”身体を体育の学びを通して育ててほしいという願いが込められている。

そのためには、まず、やってみる、参加してみる、という姿勢をもつことが求められる。課題や運動の場、他者やモノとの出会いから何をどのように感じとるかは様ではないが、その出会いを通じて、驚きや違和感、魅力などを感じ、対象に引き込まれていくことが問いをもつことや課題を追求することへとつながると考えられる。「簡単だと思ってやってみたら思うようにいかなかった」「セーフティーマットに働きかけられてつい飛び込みたくなってしまった」といったこともその一例であるといえよう。

こうして始まる探求は、「感じる」ことをその根源としながら、「夢中になる」「聴きあう」「振り返る」といったプロセスを経て学びを豊かに変化させていくと考える。探求するということは、その運動世界のおもしろさに触れ、夢中になって活動に没入する姿があるといえる。「夢中になる⇔飽和する」を繰り返しながら、自分の探求の方向性を見出し、その過程で参加の仕方や考え方を変化させていくものと考えられる。しかし、その学びを広げたり深めたりするためには、異質な他者との「聴きあう」関係が欠かせない。友達の真似をしてみる、対象になってみる、というように、自分から互いにつながろうとする行為やその関係を築こうとする営みを行うことが大切であると考え。そして、成長していくにつれてメタ的に自己を振り返り、次なる問いや課題を見出し、探求し続けることを目指したい。

また、保健学習と“てつがくすること”との関連も模索したい。誰もが、健康に生きたいと希求しているという前提に立ったとしても、その健康を支える生活には自明とされる価値を問い直す営みがなされることでより深い理解へとつながる学びのあり方も考える必要があるだろう。

これらを実現するためには、教師が異質な他者の一人として子どもの学びにかかわり、子どもとともに“てつがくすること”で、教師自身が既存の概念や方法を問い直す必要がある。今年度は、その中でも、以下の視点に基づいて、教師も一人の学び手としてテーマを探求していきたい。

(3) 研究の視点

①問いが生まれるようなシンプルな設定

学習課題を設定する際に学習者の思いを引き出すような学習内容が重要になる。つまり、課題が顕在化するように題材や場をシンプルにとらえる必要がある。そうすることで、何を探求するのかという自分の思いを反映させる余地が生まれ、探求したいことに会うことができる考える。

②教師の役割と参加

体育部では、その教科の特色から、精一杯動くことや身体全体で感じることを、身体を通して考えることを大切にしている。“てつがくすること”は、言語を介した行為のみならず、非言語の行為も含まれると考えている。教師は、その全体をとらえて子どもの学びをみとり、子どもとともに探求の道を探ることが求められる。シンプルな設定による授業づくりから、“てつがくする”子どもの姿をとらえ、具体的にどのような働きかけや足場かけができるかを、実践を通じて模索する。

2 実践事例

(1) 遊びは探求の始まり！？－1年「器械・器具をつかった運動遊び」の授業実践から

低学年の体育では、多様な運動遊びを経験することが大切である。しかし、それは、各種の運動が一樣に経験されることを意味するのではない。運動遊びをすることを通じて、自己－他者－モノの関係の中で、以下のようなことが育まれていくことが重要であると考えられる。

- ・多様な運動に出会い、その運動のおもしろさに浸るとともに、自分のおもしろいと感じたことに夢中になって遊ぶこと
- ・多様な運動や他者とのかかわりの中で、自分の抱く運動世界との違いを感じ、自明とされる価値が揺り動かされたり、多様な価値を受容したりすることによって、自分の世界を広げていくこと

そのために、教師は、子どもたちの遊びに注目し、一人ひとりが互いの自由を承認することができる環境をつくることや、それぞれの遊びに広がりや深まりを促すような解放的なかかわりをするのが求められると考えた。本実践では、「回って立てるかな」というテーマの提示と、ファミリーごとにマットを1枚渡すことから始め、子どもたちの遊びの様子を丁寧に見とりながら、子どもたちの「回って立つ」遊びが他者とのかかわりの中で豊かに広がっていくことを大切にしたい。

授業を開始して間もなく、A児が、突然、「先生、あの台（跳び箱の一段目）を使ってもいいですか？」と尋ねてきた。教師が「いいよ。でもどうして？」と問い返すと、「だってね、Bさんが、回れないから。置くと、回りやすくなるんだよ」と話した。B児が、「私は、回れないんだよね」と言いながら、回ることをけん制しているのを見て、A児が「こうやって上に立ってから手をついて回ると回れるよ」「跳び箱を蹴るんだよ」とアドバイスしたところ、B児は、跳び箱を蹴り、自分の体を回すことができるようになった。そこから、B児は回ることがおもしろくなり、繰り返し前に回る遊びを展開し始めた。

すると、それを見ていた他の子たちも、モノを追加して遊びたいという要望を口々に言いだした。モノを追加することで自分のやってみたい「回って立つ」を実現させようと、様々な遊びを展開し始めた。

- ・跳び箱の一段目を利用して、それを踏み台にしてジャンプした後、横回転して着地できるかどうかを遊ぶ子
- ・跳び箱の一段目を利用して、それを踏み台にしてジャンプした後、その勢いで跳び前転のようにして回る子
- ・跳び箱の一段目を利用して、台上前転のように回る子
- ・マットで坂道をつくって転がり着地することを試す子、坂道を前回りで登ろうとする子 など

最初は、場を作っていく中でその場に誘われて、自分のしたいことに夢中になっている子も、何をしてもよいかかわらず困っていた子も、次第に周囲をみて友達のしていることを真似したり、互いに自分のしていることを伝え合ったりして、その違いから遊びを広げていった。教師は、その様子を見て、「自分のつくった場以外でも遊んでみたらどうかな？」と促すことにした。すると、子どもたちは、活動範囲を広げ、坂で回ってみてそのスピード感に驚いたり、友達の動きを真似して思い通りに立てないことに違和感を感じたりするなど、友達の運動世界を経験してみることから刺激を受け、自分の感じた不思議な感じやおもしろい感じと出会うことで、夢中になって遊びこむ様子が見られた。

また、子どもたちは、遊びこむ中で、「回って立つ」という運動は、回転を制御することであることを理解していった。共有場面では、立つためには回転スピードが必要であること、そのためには、場を工夫して高さを利用すること、体を振って反動をつける、脚を開くなどして体の使い方を工夫することが話された。中には、回転を制御できずに回されていることがおもしろいと感じて回転スピードを加速し続ける子もいたが、それぞれが、意図的に回転スピードを調整して回る様子が見られるようになった。

「回って立つ」というテーマが、子どもによっては枠組みとしての狭さを感じることもあり、子どもたち一人ひとりに応じた授業づくりの難しさを感じたが、子どもたちが互いの違いを受容し、遊びを広げていくことができたことに低学年の学びとしての成果をみることもできたように思える。

(2) 5年生「自分の身体と向き合う」

①実態と取り組み

身体も心も変化の時期に入ってくる5年生。個人差も大きく、まだ小柄で身軽な子から、大人と変

わらない体格の子まで様々である。学習としては単純に動いていれば楽しい段階から、自分で工夫したり、見通しをもって練習したりすることにも取り組めるようになってきた。身体は良く動いているものの、この時期に経験させたい動きがまだ足りていないようにも感じていた。

その一つは、極限まで身体を使う経験である。ボールや縄などがあれば、それに対応して子どもたちは無意識に体を動かすが、用具が何もなくても自分で意識して、自分で動きを考えて動くという経験もさせておきたい。そのためには、多様な身体の使い方の蓄積がまだ必要であると捉えた。

もう一つは、自分で動きを見つけ出す経験である。コミュニケーション力や表現力が言われているが、自分が見つけたこと感じたことを意識して身体で表現し、伝えることは日常では少ないだろう。自分と向き合う“てつがくする”ことにも慣れてきた高学年としてのこの時期に、体育でも取り組むことに意味があると考え、表現運動領域を中心に取り組んできた。(児童教育も参照されたい)

実際に行った学習は、まだ経験の少ないフォークダンスやリズムダンス、そして表現運動である。さらに今回は「芸術家に学ぶ」として、プロのダンサーともふれ合う機会をもつことができた。日常とは違う動きの体験から、子どもたちが感じ取ったことを見つめてみたい。

②授業の実際

「写真のポーズを表現しよう」

1回目はオリンピック選手の一瞬を捉えた沢山の写真から自分で1枚選び、よく見て姿勢や表情、気持ちも考えてそのポーズの真似をする活動に取り組んだ。一瞬でありながら、体中に力が入っていることに気づいたり、表情からそこに込められた気持ちを考えようとしたり、ずっと続けてはられないようなポーズに呆然としたり……。子どもたちは、まず写真をよく見ることで新しい身体の使い方を発見していた。さらに、普段は意識しない自分の身体に目を向け、精一杯身体を使って一瞬の再現に取り組んだ。また、お互いにポーズを見合っ、直し合うという活動も入れたことで、それぞれの写真の見方をすりあわせ、友達と関わりながら、身体の使い方を工夫し、動きを広げていく様子が見られていた。子どもたちの感想からは「ポーズをとった時に筋肉が痛かった。それでこの筋肉は普段使っていない筋肉だと感じた」「難しかったけれど楽しくできた。普段動かさないところを動かした」「いつもの体勢を5秒間保つのは難しかった。目線や手の形を細かく真似出来た」と自分の身体と向き合い、どうしたらもっと身体を使えるのか考えながら取り組んでいる様子が伺えた。

2回目は、いろいろなダンサーの写真のポーズを仲間と一緒に真似してみることに挑戦した。写真では簡単そうなのに、やってみるとなかなかできなかったり、意外と力が必要だったり、友達と息を合わせるのが大変だったり、また新たな身体の使い方の発見があった。「一人でやるポーズは簡単だったけど、二人で協力するポーズが難しかった。最後身体が痛くなったけど、とても楽しかった」「足の筋力を使っているのを感じた。筋肉が痛くなった。これからもそういう所を意識していきたい」という感想からも伝わるように、自分の身体に改めて意識を向ける時間となっていた。写真のポーズを真似するだけという一見単純な活動に見えるが、それぞれの体つき、可動域の違いなど、実際にやってみて初めて実感することも多い。どのようなポーズが子どもたちの感覚に訴えるか、子どもたちの取り組みをどう見とるか、教師としても色々考える機会となった。ただ、このような感覚は、体育の時間だからこそ得られる非言語の“てつがくする”体験と捉えており、これからも大事に育んでいきたいと考えている。

(3) 「からだから出るものについて考えよう」3年生保健

①身体を通して考える子どもを育むために

3年生から保健学習がスタートするにあたって、まずは子ども自身が自分の身体の状態を知ることが重要ではないかと考えた。授業を通して、生涯にわたって健康について考え続け、健康な生活を送るための実践力を育てたい。

体調不良を訴えて保健室に来室する子どもには、右のようなカードにできるだけ自分自身で記入させ、養護教諭はカードと一緒に見ながら体調や心の状態を聞き取っている。約30%の子どもが腹痛を訴え、「おなかがいいい」に○で囲んでいたが、排便については、最後に排便したのがいつか覚えていな

かったり、便を見ないで流してしまうため、どのような性状だったのか、うまく答えられなかったりする場合が多い。また、記入そのものが嫌で、排便の項目だけ未記入の場合もある。

身体からは、たくさんものが出ているが、本校の児童に限らず、特に、うんちやおしっこなどの排泄物は子どもにとっては臭くて「きたないもの」という嫌悪感がある。普段、何気なく身体から出るものについて振り返り、問い直すことで、それらの仕組みや働きを理解し、身体の営みのすばらしさ、いのちの大切さを知る機会になればと考えた。

②授業の実際と振り返り

身体から出るものをワークシートに記入させたところ、44種類が挙げられた。元気や勇気、力といった五感では感じられない身体の内面から出てくるものを挙げた子どももいた。排泄物は、ほとんどの子どもが記入するのではないかと予想していたが、記入していない子どもがいたため、「トイレで出るのがあると思うんだけど、みんなは出ないのかな？」と問いかけると、「えっ！うんちって書いても大丈夫なんですか？」と嬉しそうに質問する子どもがいた。それを聞いた子どもたちが「やった～！」、「学校だから、うんちだなんて書いてはいけないと思ってた」と言いながら記入していた。それでも、「ぼくは生まれてから一度もそんなものは出たことはありません」と発言したり、記入しても消しゴムで消していたり、また、「お〇っこ」、「う〇ち」、「おおしっこ」、「おうんち」などと記入し、その部分を見えないように手や筆箱で隠す子どももいた。排泄物に対する毛嫌いする気持ちと、興味・関心とが入り混じっていることを感じ取れる場面だった。

涙は悲しいときやうれしいとき、汗は身体を動かした後や暑いとき、咳やくしゃみはかぜをひいたとき、嘔吐物は食べ過ぎたときや胃腸炎にかかったとき、息は自然に出るが走った後は苦しい息になる、うんちやおしっこは食べたり飲んだりしたら出るなどの意見が次々に出た。このように、身体から出るものが、いつ、どのようなときに出るのかについては、子どもたちは理解できているようだった。ファミリーで話し合い、意見を共有することで、「きたないもの」に対する意識が変容し、自分自身の身体に興味を持ち、考えていくきっかけになったのではないかと考える。この授業を足がかりとして、次時の学習につなげていきたい。

3今後の課題として

今年度、教師もともに“てつがくすること”に取り組むにあたり、子どもたちの動きを通した言葉にしっかり耳を傾けること、子どもの身体を通した探求の様子を見とり、問い返すことを意識してきた。シンプルな課題設定により、子どもたちが自分なりの考えで動きや身体と向き合う場面が見られるようになり、教師もさらに考えるきっかけをつかんだようにも思う。一方、具体的に精一杯の動きの中から、自分の身体意識をつかませる学習にはまだ課題も残っていると感じている。ただ、教師の意識を変えていくことが、身体を通した、言葉だけではない“てつがくすること”につながるという手応えを得たように思っている。次へのステップとして考え続けていきたい。(江部、神谷、栗原)